つながるためのバラバラ　　てん・であう・かたまり・たつ

なぜ、1972・5・15は

「シン・屈辱の日」なのか

日時：2025年5月15日（木）

開場　18:00　開始　18:30　21:00(終了予定)

場所：大正会館（大正区コミュニティセンター）　3階ホール

〒551-0003 大阪府大阪市大正区千島２丁目６－１５

長堀鶴見緑地線「大正駅」またはJR環状線「大正駅」から徒歩約30分
「大正駅」から大阪シティバス「大正区役所前」降車すぐ

参加費：

会場参加　1,500円
学生以下、障がい者700円　介助者無料
（参加費の支払いが難しい方はご相談ください。）

録画配信（後日）　1,000円

会場参加できない方に、後日、
録画（第1部、第2部のトークセッション部分）を
お送りします。（6月末まで視聴可能）
※リアルタイム配信はありません。
※当日参加で録画配信も希望される方は、会場にて当日
　参加費だけお支払いください。

申し込みは
こちらから
→

第1部　ライブ　宮城善光ナーグシクヨシミツ
第2部　トークセッション
　宮城善光×石原真衣×中村之菊×松本亜季
　会場との質疑応答

【主催】

2025・5・15 シン・実行委員会

【連絡先】

関西沖縄文庫　06-6552-6709
金城　090-3943-8814
松本　090-2087-3464

宮城善光 Nahgushiku yoshimitsu

1965年 琉球沖縄島那覇生まれ。アメリカ統治から日本再併合(復帰)と急激に変わりゆく70年代の沖縄体験が自己の音楽表現に大きな影響を与える。三線とギターの弾き語りでライブ活動中

中村之菊 Nakamura midori

1979年、東京浅草生まれ。元花瑛塾塾長。学生を雇用する農業体験と支援を実施。沖縄に過密する米軍基地を東京へ引き取ることを訴え、2022年参議院選挙、2023年千葉県議会選挙・柏市議会議員選挙に出馬。沖縄島北部に残留する米軍廃棄物の問題を訴えている。現役大学生で木工職人。著書に「抵抗-国家と言う暴力との闘い-（民草出版）2022」。

撮影：前沢卓

石原真衣 isihara mai

北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授。北海道サッポロ市生まれ。先住民と入植者のマルチレイシャル。北海道大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。21年より現職。
専門は文化人類学、先住民フェミニズム。
著書に 『〈沈黙〉の自伝的民族誌（オートエスノグラフィー）』（大平正芳記念賞受賞）、『アイヌからみた北海道150年』（編著）、『記号化される先住民/女性/子ども』（編著）、『アイヌがまなざす』（村上靖彦との共著）など。

松本亜季 Matsumoto aki

1982年大阪生まれ。大阪育ち。
大学生の頃に参加した辺野古の座り込みを経て、大阪で基地建設の白紙撤回を求める行動を立ち上げる。
2015年「沖縄差別を解消するために沖縄の米軍基地を大阪に引き取る行動」立ち上げ。
2019年より「玉城デニーさんトークキャラバン津々浦々の会」に参加。

5.15メッセージ

宮城善光ナーグシクヨシミツ

『4.28～5.15～6.23』
「もっと沖縄県が努力していれば、もっと早く普天間の移転も進んだ」防衛大臣が言い放った。
新基地建設反対を県民投票で示し、国政選挙では反対の議員を何度も選び続け、何より新基地反対の知事を選び続けているのは沖縄県民である。
沖縄の民意無視で押し付け続けても、圧殺し続けても、金をばら撒いても、自分たちの思い通りならないのは沖縄県民の努力が足りないからとの事か。
こんな発言、何年か前のこの国なら、すぐに更迭か辞任だったろうが世間もメディアも御本人も静か～に素通り状態。もう、これが異常だと思う感覚すら今の日本にはないのだろう。
アベ政権あたりからか、この国の人たちは隠すことも無くうす汚い言葉や行動で沖縄を馬鹿にし、自分たち日本に従わない敵の様に扱っている。自称愛国者のネトウヨ達は今日も沖縄差別を垂れ流し続ける。こんな美しい国ニッポンの一部に組み込まれている我ら琉球、1879琉球国日本併合、そして1972の日本再併合は「シン•屈辱の日」である。
さて、旧「屈辱の日」は、まったく主権回復など無縁の沖縄側の抗議反対の声を聞かず、沖縄県の存在を無視し天皇を担ぎ出し万歳三唱をしたアベ政権のカルト感丸出しの「主権回復を記念する式典」の強行により、この日本に組み込まれてることこそ沖縄琉球は屈辱であると確信させた。4.28に声をあげ続けてきた先輩達の思いと歴史は胸に刻みつつ、もう日本から切り離されたから屈辱の日だと考えは止めて、その日は「4.28惨殺された女性、傷つけられた女性たち」に思いを寄せ祈る日にした方が良いのでは。
また「6.23慰霊の日」は日本軍トップの長と牛島が沖縄守備の責任を放棄し自決、地獄の戦場にし沖縄の島々を捨て石扱いとしてた事が証明された日、我ら琉球民族の日本、大和人に対する怨念の日「6.23怨念の日」である。我ら琉球民族の真の慰霊の日は365日毎日が慰霊の日である。
1879琉球は日本に奪われ今も植民地状態は続く。しかし我した　るーちゅー、この魂は奪われることはない、奪われてはならない！我した琉球民族、主権回復！自己決定権を取り戻し、日本大和に抗い続けなくてはならない！
くぬ るーちゅーぬ肝ふくてぃ日本ぬんかい立ちんかてぃ行かんだれーないびらんどーやーさい！

呼応を改め主体的に加害者としての考察

中村之菊

「基地なき沖縄」に呼応するとしよう。その場合、果たして呼応する態度だけで良いのだろうか。戦後の反基地運動は結果を出せていない。ゆえに、「呼応」＝「態度」でしかないという結論が既に証明されている。この場合の呼応（応答）とは主体性無きものに等しいのではないかと考える。沖縄から毎日のように背中を押されなければ呼応が出来ない状態とは一体どういうことなのかを誰一人としてと思えるほど、思慮深く考察してこなかった。例えば、「基地を引き取って」と定期的に声をかけてもらえなければ「基地引き取り運動」の原動力が低下するという事象は「他者に呼応している」ということを頼りにしているからだろう。言い換えればそれは、「基地を引き取って」と言われなければ、「引き取ろう」という行動に出られないということだ。

昨今の社会運動から見るマジョリティの態度は「誰かの声に呼応する」ということはつまり「今日は応えたいから応える」、または「今日は忙しいから応えない」という選択肢を秘めている。選択肢さえないマイノリティは、このマジョリティの態度をどのように見ているのだろうか。マジョリティの当事者（ここでは沖縄/本土の関係性において）であるわたしは、この態度を無責任だと感じてきた。そう強く思う理由は他にもある。沖縄に応答するといったとき、「沖縄の声」という主語には「沖縄の様々な声」は含まれておらず、結局のところ「自分が呼応できる沖縄の声」を選択しているということだ。
戦後から「呼応する」ことで結果を果たせていないこれらの運動を鑑みると、冒頭に示したとおり「呼応」とは「態度」を示すだけのものでしかない。
自己のおかれた社会的立場を考えるとき、本来ならば被害者が声をあげる前にやるべきことがあったのではないか。「呼応」などという言葉で、足踏みしている段階ではない。加害者という当事者は、「呼応」という曖昧な態度ではなく、他者に委ねない自発的・主体的な思いと行動がいま求められる。

5.15に寄せて

松本亜季

沖縄に対して圧倒的な権力をもつ私たち日本人は、その間違いを修正できずにずいぶん時を重ねてしまった。そして、無情にも時間は流れていくばかりである。私たちはいつ、それらの間違いを確認し、それを修復する道を歩みだすことができるのだろうか。今、歩み出せているのだろうか。
沖縄以外の日本における反基地闘争の中にある「継続は力なり」という風潮や「沖縄の闘いに勇気をもらう」などという言葉には違和感を覚えながらもその振る舞いを身につけてきた。
石原真衣氏がその著書[i]の中で記している「痛む身体」を無視する「思想的消費」という言葉にはっとさせられる。そして、日本におけるレイシズムを支えているのは「良識派の知識人／支援者」であるという告発。さらに、日本人女性知識人、多数の日本人女性に突きつけられる今日に続く先住民女性が被る多重なレイシズム、暴力についての認識と責任は、沖縄を通して見えてきたものとまさに重なり、私は、問われるべくして問われているのだと思う。

思えば「4.28屈辱の日」も「5.15復帰の日」も「6.23慰霊の日」もその言葉のどれをも鵜呑みにしてはならなかった。鵜呑みにし、日本人がそれを一緒に祈ったり闘ったりしてきたことが、日本社会の間違いをより一層深刻にしてきたのではないだろうか。
思えば、幼いときから受けてきた人権教育も全部を鵜呑みにしてはならなかった。私のこれまでは、これも石原氏の著書で認識することになった「Unlearn－学び捨てる－」の連続だった。身体の内側に無意識にもはびこる「みんな同じ人間」「他者を理解する」という“きれいな”言葉を捨て去ることと、改めて学び直すことの連続だった。
私自身、大人と言われるようになってからずいぶん久しいが、それでもやはり「教育」を授けた親を、上の世代を批判しなければならない。
なぜあの戦争が終わったとき、天皇の責任を問えなかったのか。
戦死者に向き合い、自分たちの責任を問わなかったのか。
マジョリティとしての生きやすさ（相対的な）を自覚することなく、マイノリティと「連帯」することに夢中になってきたのか。
人権教育において差別者の側にいる自分と、差別を支える構造を問い、それを解体する術を示してくれなかったのか。
その批判は、今は自分に向けられているのであり、子どもたちからじっと見詰められているのである。これまで出会った人たちが、私をその道まで連れてきてくれた。ふらふらしてて自信はないのだけれど、そんなことは言ってられない。歩みだすときに、周りに存在する多様なものや小さいもの、弱さも大事にできているのか、点検しながら。かぼそい道だとしても実は雄大な道かもしれない。すでに歩いている人たちがいるような気がする。

[i] 石原真衣 村上靖彦『アイヌがまなざす 痛みの声を聴くとき』岩波書店、2024年